徹底した自働化と若手の活用。この2つを武器に高品質と低コストを実現。客先から高い評価と信頼を得る。

株式会社 トチバン

不景気をモノともせず8期連続の増収

世界中を震撼させたリーマンショックから、この9月で1年がたった。この間、多くの産業が不況のどん底に突き落とされた。やや持ち直したかにも見えるが、まだ予断は許さない。とくに、自動車や家電といった基幹産業の裾野を支えてきた部品メーカーの疲弊感は強く、未だに回復の兆しが見えない、というところが大半だ。そんななか、平成14年以降、8期連続で右肩上がりの成長を続けている企業がある。

株式会社トチバン。栃木県下都賀郡に本拠を置く部品メーカーだ。創業は、昭和33年。昨年、50周年の節目を迎えた。当初は家電用部品の板金加工からスタートしたが、大量生産時代を迎えた高度経済成長期にプレス加工にも進出。今では、プレス加工を主体に、板金から溶接、組立、金型のメンテナンスまでを一貫してこなす態勢を整えている。

売上高の構成比は、家電製品が全体の7割、残りの3割近くを自動車が占める。家電部門では冷蔵庫やエアコン、給湯器などの主要部品を製造しているが、メインは冷蔵庫。なかでも、冷蔵庫の顔となるトビラのプレス加工には定評があり、全量を日立グループの家電メーカーである日立アプライアンスに納入している。一方、自動車関連部品は、いすゞ自動車のトラック用マフラーが主体。溶接と組立を組み合わせて、一定のまとまりをもったユニットとして出荷している。

平成20年5月期の売上高は26億1000万円。同年の9月から10月にかけてリーマンショックの影響を受け、自動車関連の売上高はやや落ち込んだが、家電関連が好調で、翌21年5月期の売上高は26億6000万円と、8期連続の増収を記録した。社員数80数名、資本金は1500万円だ。

▲左 NC-1 150トン A-8ロボット 6台ライン LFG-600E、高速搬送対応NCブランクフィーダ付き　右 NC-1 150トン A-8ロボット 6台ライン

▲NS2-160トン ＋ LFG-800E

▲NC2-160トン順送プレス

冷蔵庫の重要な意匠部品であるトビラを量産

同社の「売り」は、何といっても冷蔵庫のトビラであろう。トビラは意匠部品の最たるもので、外観が極めて重視される。最近のドアは、彩色をほどこしたペットフィルムを貼り付けた板材をプレス加工してつくる。表面を磨くなどの後工程はなしで、プレス加工が終わればそのままトビラとして納品される。したがって、傷１つ、打痕1つ残さずプレスしなければならない。

同社は、このきわめて要求度の高いプレス加工を、月産数万枚のオーダーでこなしている。機種別、色別に分類するとアイテム数は70種類以上にものぼるが、不良品率も極端に低く抑えられている。その技術力と品質の高さに対する客先からの信頼は厚い。

レベラフィーダつきのロボットラインを導入して省力化を実現

同社を率いる須藤隆志社長は、52歳。技術系の大学を卒業後、父親が創業した同社に入り、平成6年に2代目社長に就任した。

「品質のいいものを安くつくって顧客の要望に応えたい。それには、徹底した自働化と省力化が不可欠だ」という信念のもと、社長就任前から一貫して自働化を推進してきた須藤氏に、ある時、転機が訪れる。都市計画による道路敷設のため、従来の工場が建っていた土地から立ち退かざるを得なくなったのだ。

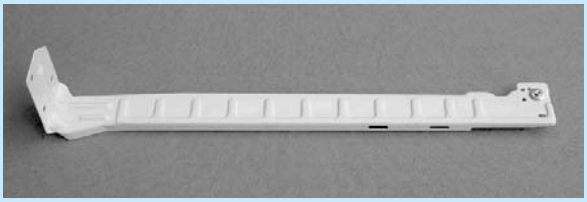
「部品づくりはあまり儲からない商売でしたので、これを機会に廃業しようかとも思ったのですが、待てよ、ここは逆にチャンスかもと考え直しました。そして、移転先に、ある意味、理想的な工場を建てて、もう一度チャレンジしてみるのも悪くない、と思ったのです」

このとき、プレス加工のさらなる自働化を前提に、以前からつきあいのあったAIDA社に、新設するプレスラインの仕様を相談。同社と相談を重ねながら、まずは150トンのロボットライン2本を導入することにし、新築する建屋のレイアウトもこのラインに合わせる形で設計した。

「AIDAさんには色々な仕様に対応したレベラフィーダがあります。今回のフィーダには、アンコイラから金型入り口までの通板作業をボタン１つで行えるオートスレッディング機能がついており、段取りの手間が省けます。また、操作盤はタッチパネル式で操作性がよい、独自機構の採用によりロール清掃が簡単にできる、などの特徴もありました。このレベラフィーダ付きマシン(A-8ロボット)を8台連ねたラインと6台のラインを、都合2本導入することで、大幅なコストダウンと省力化が可能になったのです。ラインにコイル材を

▲NC1-200トン ＋ LFG-600E

▲製品例


▲製品例

株式会社 トチバン

代表取締役
須藤　隆志氏

▲本社・工場前景

会社のあらまし

所在地　〒329-4305 栃木県下都賀郡岩舟町静戸1529-3
TEL 0282-54-3600　FAX 0282-54-3322
代表取締役社長　須藤 隆志
資本金　1500万円　社員数　80名強
売上高　26億6000万円(平成21年5月期)

セットしさえすれば、あとは自動で半完成品にまで仕上げてくれるのですから」(須藤社長)

冷蔵庫のトビラの仕事が舞い込んできたのは、ちょうどこのロボットラインが完成した頃であった。このラインを使って実績を積み、顧客のハートを掴んだ同社は、トビラの分野で圧倒的な存在感を示すようになっていく。その後、ロボットラインは3本増えて、計5本が稼働している。

定期採用で会社の若返りとパワーアップを図る

もうひとつ、須藤社長が力を入れてきたのが、若い人材の採用と育成。若い力が伸びなければ会社は衰退すると考え、10年ほど前から新人の定期採用を行っている。募集しても応募者がこなかったり、不況で採用を控えたいと思うときもあったが、歯を食いしばって毎年最低1人は採用してきた。その努力が実り、ここ数年、若手が戦力として大きな働きをするようになってきた。

「今、社員の平均年齢は38歳。一頃に比べるとずいぶん若返りました。自動ラインの運転はすべて若手に任せています」

AIDA社のプレス機は、機種が変わっても操作性や使い勝手は共通の思想で設計されており、ほとんど変わらない。そのことも、若手の活用にプラスに働いているという。

量産をこなしながらも高い生産性と品質を保つには、各種の生産管理も欠かせない。たとえば、金型。同社は新規の金型の製作は専門メーカーに外注しているが、メンテナンスは自社で行っている。競争力を維持するという観点で見れば、この点もポイントの1つにあげられよう。

「世の中に必要とされる会社であり続けたい。不況になっても、あそこにだけは残っていてもらわないと困る、という会社になりたい」

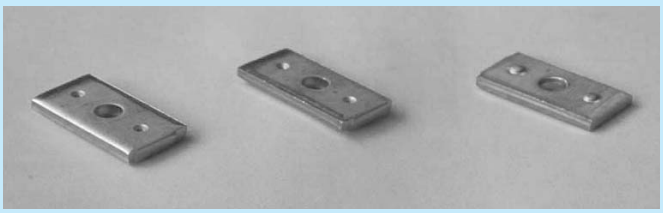
そう語る須藤社長。未来への思いを問うと、

「この会社と設備と技術をどう次の世代につないでいくのか。これが社長としての私の最大の課題だと思っています」

と、力を込めた。

▲LFG-600E

▲PDW-200トン ＋ LFS-400E



▲製品例

▲製品例

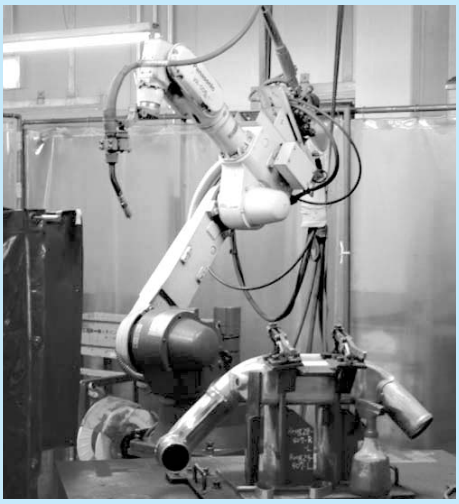
▲NC1-200トン A-8ロボット 4台ライン

▲NC1-150トン8台 A-8ロボットライン ＋ LFG-600E

▲NC1-110トン A-8ロボット 5台ライン

▲LFG-600E

▲オートローラバインダー

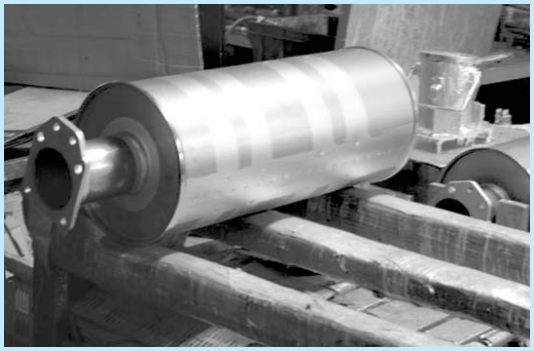


▲溶接ロボット

▲溶接

▲マフラー加工品

▲金型倉庫



▲塗装工程

▲溶接半田付け

提供：アイダエンジニアリング株式会社　神奈川県相模原市大山町2−10　TEL042−772−5271